

『説文解字注』と『爾雅』積草との関連について——艸部

南 谷 葉 子

『説文解字注』艸部には或る説解に対して「見釋艸」とか「釋艸曰」という注が付けられていることが多い。そこで『爾雅』積草と照合してみると完全に一致するもの、字句に多少の違いのあるもの、或はかなりの差異をもつものがあることがわかる。それらの違いに対して段玉裁は更に詳細に注をつけているが、中でも特に関心をひくのは次のような例である。

按萋蒿俗語耳。古祇呼萋。釋艸古讀或於萋蒿句絶。(『萋』一篇下十九a段注)

今釋艸紅龍古、其大者薺、萋齊實。許所據絶不同。(『薺』一篇下五十二a段注)

これによると今我々のみる『爾雅』(所謂郭璞注の今本爾雅)と許慎のみた『爾雅』とは形を異にすることになる。では一体、許慎の拠った『爾雅』とはどのようなものであったのか、また段玉裁はそれについてどう考えていたのか。これらの疑問点を明らかにするために試みに艸部について整理、分類を行ったものが以下の表である。勿論これは作業の第一段階にすぎず、更に『説文解字注』木部、竹部、禾部と『爾雅』との関連についても検討しなければならない。

説解と積艸とを対比しAを一致例、Bを不一致例とし、Aは内容上の違いから六分類、Bは段玉裁のそれへの対処の方法をもとに、十に分類した。

『説文解字注』は『経韵楼本説文解字注』(芸文印書館影印本)を用い、『爾雅』は『汲古閣毛本爾雅』を用いた。(以下、前者を『段注本』後者を『毛本爾雅』と呼ぶこととする。)『毛本爾雅』を選んだのはそれが段玉裁の拠った『爾雅』に最も近い形のものと考えたからである。

凡例

- (一) 表の各欄の見出しはAの一のみに記し以下は省略した。最下段は特に表記のない場合は段注である。
- (二) 説解の「从艸」の部分は省略した。
- (三) 分類例の下に記す数は各々の合計であり、()中に記入した数は直接積艸と対応するものではないが、関連のある文字として数えたものである。(例えば「菊」大菊 苧蓬麥(説文七b) ↓大菊蓬麥(積草)の「菊」の小篆の前に『段注本』では「蓬」蓬麥也を挙げているのでその「蓬」を数えて()内に記した。)
- (四) 「蘇」桂荏也(説文五a) ↓蘇桂荏(積草)に続いて「荏」桂荏 苧蘇也と『段注本』で互訓している場合は共に数に加えてある。
- (五) A或はBの中で分類条件が二つ重なる文字についてはそのいずれか一方(主要と思われる方)のみで処理した。
- (六) 行の左側に()内に記した文字は段玉裁が「釋艸曰」と

と引用した文字であるが『毛本爾雅』と一致していないものである。

通志堂本を用い、『十三經注疏校勘記』(以下『校勘記』と略)は『皇清經解』所収のものを用いた。

なお『經典釈文』(以下『釈文』と略)は『四部叢刊』所収の

A 段注本説解と毛本爾雅との一致例

一 完全に一致しているもの

二十例 (三)

一篇下葉数	小篆の文字	段注本説解	毛本爾雅	段注・釈文・校勘記
五 a	蘇	桂荏也	蘇桂荏	
二十七 b	龍	天薺也	龍天薺	
五十二 a	蒿	藪也	蒿藪	

二 説解が不充分と考えられるもの

七例

十八 b	歲	馬藍也	歲寒漿 歲馬藍	
五十 a	蒙	王女也	蒙玉女 唐蒙女 羅女 羅菟絲 (兎)	【校勘記】 「蒙王女」唐石經單疏本雪認本元本閩本同。監本毛本王誤玉。

三 説解に他の語句が加えられているもの

八例

三 b	藪	赤苗句嘉穀也	藪赤苗	
五十一 a	芑	白苗句嘉穀也 詩曰維藪維芑	芑白苗 (芑)	今本無此六字。依韻會所據補。
二十二 b	芑	地黃也 札記鉞毛牛蠹 羊芑豕微是	芑地黃	

四 内容は一致するが、文字または表現に異なるもの

三十六例

四 b	芋	麻母也 一曰芋即臬也	芋麻母 (芋)	【釈文】 【校勘記】	「芋」説文作芋云即臬也。 「芋麻母」唐石經單疏本雪認本同。…注疏本芋訛芋。
十一 a	蓑	蓑楚逗銚弋 一曰羊桃	長楚銚弋	【釈文】	「蓑」本今作長。「弋」字亦作弋。
二十九 a	藟	藟靡逗藟冬也	藟藟藟冬	【釈文】 【校勘記】	「藟」又作靡同。 「藟藟藟冬」釋文唐石經單疏本注疏本同。雪認本藟作靡。釋文藟又作靡同。
四 a	蒞	鹿藿之實名也	藟鹿藿其實蒞		

〈備考〉 釈文・校勘記を考慮に入れると「藟」は分類一に、「芋」「蓑」は分類三に入れることができる。
五 或体「」を挙げると毛本爾雅と一致するもの

三例

四 b	藟	臬實也	廣臬實	釋艸作廣。
十四 b	蓍	牛藻也	蓍牛藻 〔藻〕	
五十 b	〔藻〕	藻或从澡		

六 段注本説解で「AハB也」とするが、毛本爾雅では「BハA也」と釈しているもの（段玉裁のいわゆる転注の關係）

十一例 (三)

十一 a	薊	芙也	芙薊其實薊	許以芙釋薊則爲一物、而芙字又不類列於此未聞。
十四 a	蔕	黃蔕職也	職黃蔕 (職)(除)	【釈文】 「職」字又作職。
二十 a	菟	茅菟逗茹蘆 人血所生可曰染絳	茹蘆茅菟	蘆音閭、鉉本作蘆。

B 段注本說解と毛本爾雅との不一致例

一 今本（郭注本）爾雅と句読を異にする

十二例

十六 b	藁	土夫也	土夫王 藁月爾 (藁)	各本作藁月爾也。今依爾雅音義。陸德明曰藁字亦作藁、紫藁菜也。說文云藁土夫也。其所據說文、必與爾雅殊異而併之、不則何容併也。今本說文恐是據爾雅郭本郭注改者。但許君爾雅之讀、今不可知矣。
十七 a	夢	灌 渝	葭蘆莢亂其萌蘢 蒹葭華榮	今釋艸葭蘆莢亂其萌蘢。郭云今江東呼蘆筍爲蘢、音繼絕。下文蒹葭華榮、郭別爲一條。許君所據爾雅、夢灌渝、句字皆與今本大乖。今不可得其讀矣。
二十一 a	蕝	豕首也	黃菟瓜 蒟蕝豕首	釋艸曰蒟蕝豕首。許無蒟字者、攷太平御覽引爾雅黃土瓜孫炎曰一名列也、按叔然以蒟上屬。許君讀葢與孫同。
五十一 a	薈	薈虞句 蓼	薈虞蓼	當有也字。蓼下云薈虞也。故此云薈虞蓼也。句絕與郭樸異。薈不與蓼類則者、以字有篆籀別之。
五十二 a	蹄	薺實也	紅龍古其大者蹄 薺薺實	今釋艸紅龍古、其大者蹄、薺薺實。許所據絕不同。

二 小篆の配列をもとに推論

三例

九 a	芄	蘭芄逗莞也 詩曰芄蘭之枝	藿芄蘭	釋艸藿芄蘭、此芄當爲藿。說文莞與蘭蒲爲類、芄蘭與香艸爲類、割分異處、斷非一物。或曰莞衍字。
十二 b	苦	大苦逗苓也	藟大苦	釋艸苓作藟、孫炎注云今甘艸也。按說文甘字解云甘艸矣。倘甘艸又名大苦又名苓、則何以不類列、而割分異處乎。且此云大苦苓也、中隔百數十字、又出藟篆云大苦也。此苓必改爲藟而後畫一、即畫一之、又何以不類列也。
二十三 a	藟	鹿藟也 一曰蔽之屬	藟 藟	前荏篆訓鹿藟之實、此藟訓鹿藟、則當類處。徐鍇曰釋艸藟鹿藟、藟藟二者各物、疑字形之誤、以藟藟爲鹿藟也。玉裁按蓋藟誤爲鹿、淺人因妄增藟字耳。

三 双声疊韵

十 a	蕘	蕘蕘也	竹蕘蓄	三字句。釋艸云竹蕘蓄。按竹者釋毛詩衛風之竹也。韓魯詩皆作蕘、毛詩獨段借作竹。爾雅與毛詩合。蕘蓄疊韵通用。本艸經亦作蕘蓄。
十 a	蕘	蕘蕘也	竹蕘蓄	

三例

四 統言・析言

十三 a	菅	菅也	白華野菅	按統言則茅菅是一、析言則菅與茅殊。許菅茅互訓、此從統言也。
十三 a	茅	菅也 可縮酒爲藉	白華野菅	

二例

五 单音節・複音節

十七 b	蕘	艸也 枝枝相值葉葉相當	蕘蕘馬尾	玉篇蕘下引說文、謂即蕘蕘馬尾商陸也。蕘同蕘。攷本艸經曰商陸一名蕘、句根一名夜呼、陶隱居曰其花名蕘、是則蕘呼曰蕘蕘、單呼曰蕘。擲風采蕘采非、毛傳曰蕘須也。釋艸曰須返蕘從。說文曰蕘須從也。三家互異而皆不誤。蕘須爲雙聲、蕘從爲疊韵。單評之爲蕘、衆評之爲蕘從、單評之爲須、衆評之爲須從、語言之不同也。或許所據爾雅與今本異矣。
二十二 a	蕘	須從也	須蕘從	

三例

六 積木との関連

十九 a	蕘	艸也 詩曰莫莫葛蕘 一曰栢櫟	諸慮山櫟 虎櫟	按凡藤者謂之蕘、系之艸則有蕘字、系之木則有櫟字、其實一也。戴先生詩補注說、葛蕘猶言葛藤。爾雅山櫟虎櫟、山海經卑山多櫟皆是也。
三十 a	栢	魚毒也	栢魚毒	
三十二 b	栢	櫟栢實裹如裹也	櫟其實栢	爾雅釋木栢魚毒。…玉裁按爾雅栢字本或作栢、入於釋木。本艸及許君皆入艸部。
				依爾雅音義正誤。裹栢同音也。郭云栢莢子聚生成房兒。詩箋作栢、釋木栢其實栢、皆即栢字也。

七例

七 今本（爾雅）または説解に対する疑義（△印）

奎

十八例（三）

十四 b	菴	佳也 詩曰中谷有菴	菴△ 菴	佳各本作菴誤。今正。王風中谷有菴、釋艸菴菴。毛傳曰菴菴。蓋爾雅本作佳、與毛傳菴字同。後人輒加卅頭耳。
十五 a	菴	夫離也	菴△ 菴	按前既有菴艸可以作席之文、復出菴字、則爾雅菴菴非可以作席之菴也。
十五 a	菴	夫離上也	菴△ 菴	【校勘記】「菴菴」菴當作菴。菴乃別一字。按玉篇菴下引爾雅曰、菴夫離其上菴、與說文同。知古本爾雅作夫不作菴也。
六 a	菴	菜類蒿 周禮有菴菴	菴楚葵	今說文各本於艾菴二字之下、又出菴字訓楚葵也、从艸斤聲。此恐不知菴即菴者、妄用爾雅增之。攷周禮音義曰菴說文作菴、則說文之有菴無菴明矣。
二十一 a	菴	楚葵也	菴楚葵	
二十六 b	菴	扶渠莖	菴莖菴	今爾雅曰其葉菴、音義云衆家無此句惟郭有、就郭本中或復無此句亦竝闕讀。玉裁按無者是也。爾雅假葉名其通體、故分別莖華實根各名、而冠以荷夫渠三字、則不必更言其葉也。或疑闕葉而補之、亦必當曰其葉荷、不嫌重複無庸臆造菴字。
二十七 a	荷	扶渠葉	其葉菴	【積文】「菴」本或作扶。「渠」本又作菴。

八 積草（爾雅）以外のものと一致

十一例（二）

六 a	薇	菜也伯藿	薇垂水	見毛傳。：釋艸云垂水、薇之俗名耳。不當以生於水邊釋之。
十六 b	藿	水邊艸也	藿蔓子	漢書子虛賦音義曰藿于藿艸也、生水中揚州有之。釋艸藿蔓子、藿即藿、蔓子即藿子。
二十三 b	藿	芰也 楚謂之芰 秦謂之藿 芰	藿芰芙蓉 藿藿	周禮加籩之實有藿、注藿芰也。子虛賦應劭注同。

九不詳

六例

十 a	茗	艸也	茗山葱 (葱)	釋艸茗山葱。按爾雅雖有此字、然許君果用爾雅、何以不云山葱而云艸也。凡所不知寧從蓋闕。 【校勘記】「茗山葱」釋文五經文字唐石經單疏本雪認本元本同作葱。閩本監本毛本作葱、依說文改。說文葱菜也、从艸恩聲。
十三 b	蘄	艸也	薛山蘄 莛牛蘄 薛白蘄 蘄莛蘄蕪	釋艸蘄字四見。不識許所指何物也。
四十八 b	葍	艸也 詩曰食鬱及葍	葍山韭	爾雅葍山韭、郭注謂山中多有此菜、如人家所種者。故許不謂之菜與。

十 異同についての段注なし

二例

三 b	芝	神芝也	茵芝	釋艸曰茵芝。論衡曰土氣和故芝艸生。
九 b	藨	藨蕪也	藨從水生	三字句。藨蕪雙聲。

以上をまとめると、『段注本』艸部の四百四十二文字の中で『爾雅』積草との関連をもつものは百六十三文字ということになる。

である。本稿につづき『説文解字注』の木部、竹部、禾部などの検索を今後の課題と考えている。最後に、今回の作業に際して説文読書会の記録を参考にしたこと付記する。

A表の合計は八十五、これに(六)を加え九十一文字
B表の合計は六十七、これに(五)を加え七十二文字